

史遊会通信

No.241号
平成27年
4月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

三月講演要旨

日露戦争の世界史的意味

太田 精一

一・日露戦争直前の大国と国際情勢
二〇世紀初頭の世界は、ヨーロッパの列強が、植民地争奪戦を繰り返す帝国主義の時代であった。

当時の世界の大国は、英、露、仏、独、米の欧米諸国であったが、日清戦争に勝利し、義和団の乱の鎮圧に向けて活躍した日本は、唯一有色人種国家として大国の一角に割って入る勢いを示していた。

そんな時期にロシアは、不凍港を求めて南下を始め、極東支配に乗り出した。ロシアの勢力圏拡大を警戒する英国は、新興国日本との結びつきを強化してロシアの極東進出を牽制しようとした。日本もかねてからロシアの

朝鮮への進出を阻止しようとしていたため利害が一致し、一九〇二年日英同盟が成立した。日本が、世界有数の大国である英国と同盟関係を結んだことは、世界の注目を集めたが、それだけ両国ともロシアの脅威を強く感じていたことを物語っている。

では、当時大国とみなされている国家は、どんな要素を備えていたのであるのか。それについて英国の歴史家コレリー・バーネットは次のように論じている。

「大国とは、各国の国力が軍事力のみならず経済力、技術的資源によっても決まることはいままでもない。また、外交政策を実施する際に現れる機敏さや先見の明、断固たる決意も国力の要素である。さらに社会的政治的

例会のお知らせ

◎ 四月例会

日時 平成二十七年四月二十二日(水)
午後六時十分〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 村上 邦治氏

テーマ 神道界を沸騰させた

明治祭神論争

五月号自由執筆 中込勝則、三戸岡道夫、

安田保之の諸氏 締切四月末

◎ 五月例会

日時 平成二十七年五月二十七日(水)
午後六時十分〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 中込 勝則氏

テーマ 未定

五月号自由執筆 千坂精一、新井宏、

柴田弘武の諸氏 締切五月末

組織の効率も忘れてはならない。なかでもその国自体、すなわち国民とその技術、エネルギー、野心、規律、創意工夫、信念、神話や幻想なども、国力をかたちづくる重要な要素である」と。

日本は、経済力、技術的資源は、欧米の大国に劣っていたが、政治的組織の効率及び民衆の高さや規律、創意工夫、信念などの点では決して欧米の大国に劣るものではなかった。まして、皇帝の専制と貴族の君臨する身分格差の激しいロシアよりは、ずっと近代国家としての要素を備えていたのである。

とはいえ、人口、工業力、兵員動員力、軍艦保有数などは、ロシアに比べ極端に劣り、もし、戦って長期戦になれば、敗戦は免れないものと、日本政府高官及び陸海軍上層部は、考えていた。

そこで、ロシア軍の極東での軍備が十分整わないうちに、短期決戦に持ち込み、有利な条件で講和条約を結ぶというシナリオを描いた。だが、それはあくまでも日本の防衛ラインの先端である朝鮮半島が、ロシアの権益にさらされる場合に限ってという条件付きであった。

二、ポーツマス条約を巡る日露の外交戦

ロシア側は、朝鮮半島まで制圧し、満州、朝鮮の利権を確保できれば、日本本土までの侵攻は考えていなかったようである。

だが、朝鮮を巡る日露の確執は強まり、ついには一九〇四年二月、一年七カ月に及ぶ凄惨な戦いが、満州の各地と日本海、黄海の各所で繰り広げられた。

そのほとんどの戦場において日本は、勝を拾うことが出来、日本海海戦においては、圧倒的な勝利を収めた。

だが、その勝利も日本国民の多大な犠牲の上に成り立ったものであり、国の総力を挙げたの戦いであったため、国力のほとんどを使い切っていたのである。

戦争遂行能力の限界を感じた政府及び軍は、奉天の大会戦及び日本海海戦後すぐ、米国に平和交渉の仲介を依頼した。新興大国米国もその地位にふさわしい荣誉を担って、進んで仲介に乗り出したのである。

こうして一九〇五年八月、セオドア・ルーズベルト米大統領の仲介のもとに、米国ポーツマスにおいて日露の講和会議が開かれることになった。

会議に先立って日本は、金子堅太郎を米国に派遣、親日世論の醸成に勤めさせた。

彼は、ジャーナリズムを味方につけるため米国の各地で講演、日本は、自衛のための戦

いであり、領土的野心のないことを強調し、米国民の同情を集めることに成功した。

また、英国へは貴族院議員末松謙澄を派遣し、ヨーロッパに湧き上る「黄禍論」を抑えることに努めさせた。さらに、高橋是清を米国に派遣、日本公債の購入を促進させている。ルーズベルト大統領は、親日家として知られ、忠臣蔵や新渡戸稲造の「武士道」などの書物を愛読していた。

ロシアは、講和会議のテーブルに着く前に、米国の世論をロシア側に惹きつけるため、新聞記者と頻繁に会見、日本側の非を訴えた。

特に、仁川、旅順への先制攻撃は、宣戦布告以前であり、国際法違反だとして、米国世論にアピールした。また、日露戦争は、キリスト教文明と異教徒の戦いであるとして欧米諸国の共感を呼ぶよう努めている。

講和会議での日本の要求は、十二カ条に渡り英文でロシア側に提出した。ロシア側は、そのうち八カ条については応諾したが、領土と賠償については、頑として応じようとしなかった。

結局、講和会議は、賠償金を得ることなく、樺太の南半分のみ割譲だけで決着をみた。双方に不満を残しつつ、当時の両国の国内事情を考慮に入れた帰結となったのである。

それでも日本は、①韓国における優越的な管理権、②ロシアの満州からの撤退、③ロシ

ア沿岸の漁業権、④旅順・大連など満州におけるロシアの租借権の日本への譲渡、⑤長春から旅順までの南満州鉄道の日本側への譲渡など朝鮮半島のみならず満州への進出のきっかけを掴む成果を得た。

三．日露戦争後の大国の帰趨

日露戦争後、世界の国際情勢は、大きく変化した。

まずヨーロッパにおいては、大国ロシアが弱体化し、オーストリア・ハンガリー帝国もかつての栄光を失って新興国ドイツとの連携を強めた。英、仏は、これまでの強大さを誇ることは出来なくなったものの世界各地に植民地を抱え、依然として世界に君臨していた。

それに割って入ったのがドイツである。ドイツは、オーストリア・ハンガリー帝国に手を伸ばし、ヨーロッパにおける覇権を英、仏と争い、利権を求めてアジア、アフリカの各地を植民地化して行った。

ヨーロッパ情勢は、日増しに悪化し、一九一四年七月ついに第一次世界大戦が勃発した。三年余にわたる戦いの後、専制君主の圧政に苦しみ疲弊したロシアに革命が起き、社会主義政権が樹立された。

一方、太平洋及び極東においては、覇権を巡って日米の対立が顕著になった。満州の利権を狙う日本に対し、米国は機会均等、門戸

開放のスローガンのもとに日本を批難している。米国は、第一次世界大戦後、戦勝国となつた日本の太平洋及び満州への進出を警戒して対日感情が悪化、日本移民排斥運動が活発化し、そのことを受けて一九二四年移民制限法案が可決された。

こうした大国間の確執とは裏腹に、日露戦争の日本の勝利は、世界の各地で植民地支配から脱却し、独立を果たそうとする人々の覚醒を促した。

中国、東南アジアからの日本への留学生が日露戦争後急激に増えている。だが、日本で学んだ学生たちが本国に帰り、抗日運動のリーダーとなった例も少なくない。

孫文や蒋介石などは、日本の露骨な対中政策に危機感を抱き、中国に帰国した後、抗日戦線を主導している。抗日戦は、米、英の支援を受けた蒋介石の率いる国民政府軍とロシア革命により成立したソヴェエト・ロシアの支援を受けた毛沢東の率いる人民解放軍が共同して当る国共合作を成立させた。それにより日本は、泥沼の戦争に引きずり込まれ、太平洋戦争へと駆り立てられた。中国は対日戦に勝利したものの、第二次世界大戦終了後、国、共の内戦に勝利した中国共産党軍が、中華人民共和国を樹立している。

大国への仲間入りを果たした日本は、今次大戦の敗戦によってその地位を失った。

四．人種差別撤廃と民族解放への道

日露戦争は、人種の平等、民族の独立への覚醒を促した。第二次大戦後、植民地支配を受けている世界の各地で独立闘争が起こり、多くの国が独立を勝ち取った。

だが、それらの国々の多くは、植民地時代に西欧列強によって線引きされた領土を基盤としており、後に紛争の種を引き起こす原因ともなっている。

一九五五年、スカルノ・インドネシア大統領が、有色人種国家二九カ国の代表を同国のバンドンに招き、バンドン会議を開催、人種差別の撤廃を世界に向けて呼びかけた。それをきっかけに、国際社会で人種差別が大きく取り上げられるようになり、少なくとも法的には、人種差別を認める国は無くなった。

一九六〇年は、アフリカの年といわれ、アフリカで、多数の国が独立した。その後、これら諸国は国際連合に加盟し、今や非白人の加盟国は、白人国のそれを上回っている。

日露戦争の戦場となった中国はその後、抗日戦を戦い抜き、今や米国と対抗するほどの経済力、軍事力を備えた大国となり、アジアの盟主に収まりつつある。

中国を戦場として日露戦争を戦った日本は、勝者の驕りが国力以上の戦争を繰り返し、今

次大戦の敗戦により、明治以後獲得した領土のすべてを失った。

だが、経済の発展を軸に不死鳥のように蘇り、アジアの先進国として平和国家の道を歩み、いち早く国際連合に加盟しアジアのみならず世界の平和と繁栄に貢献してきた。

中国は、日露戦争で国土の一部である満州を日本の勢力圏下に取り込まれ、やがて日本の傀儡政権満州国の誕生を阻止することが出来なかった。その上、国土の全域を日本軍によつて蹂躪され塗炭の苦しみを味わったが、満州に残した日本の鉱工業設備、インフラストラクチュアーを活用し、世界第二位の経済大国に押し上げるきっかけを掴んだ。大きな犠牲を払った国づくりではあったが、その存在は世界に大きな影響を与えている。

日露戦争の真の勝利者は、中国と民族解放を成し遂げ、独立を達成したアジア、アフリカの国々であったのかもしれない。

了

自由執筆

韓国の濟州島の悲劇

隆 恵

濟州島は、韓国最高峰の山を頂く火山島で、朝鮮半島の南部に位置する。その歴史は、耽

羅国として朝鮮半島の百濟や新羅に属するところがなく、日本書紀にも六世紀頃からしばしば倭国に朝貢したと登場する。しかし、十二世紀頃に半独立国として高麗国の属州に編入され、十五世紀になると李氏朝鮮王国に完全に併合される。

土地は平野部が少なく肥沃でもないので漁業や牧畜で生計を立て、李氏朝鮮時代は王族や両班の流刑地としてその存在が記録されてきた。

第二次大戦後、韓国が日本から独立するに際して、濟州島の人たちは韓国からの分離独立運動を起こして3万人ほどが虐殺され、結局韓国からの独立はならず今日に至る。この大虐殺の際には、多くの濟州島の人たちが日本に避難したようで、そんな経緯もあって、濟州島の人たちは本土の韓国人よりも日本人に、より親近感を持つているとも聞く。このように濟州島の歴史は苦難の連続であったが、近年新たな苦難が押し寄せている。

戦後の濟州島は、ソウルの大企業が長期滞在型の南国リゾート観光地として開発し、一般の人たちの観光地として、また本土や日本のオジさんたちのゴルフやカジノや女遊びの遊興地として栄えた。ところが、ここ十年間の韓国経済の飛躍的發展が濟州島には裏目と

出た。と言うのは、本土の人たちはハワイやグアムや東南アジアの本格的なリゾート地に行くようになり、一方日韓のオジさんたちの遊興客は、韓国の風営法の改正でバーやクラブでのホステスの接客サービスが違法となったので、激減してしまった。

元々濟州島は、日本の対馬の西に位置する島で決して南国の気候ではなく、見るべき観光所も少なく沖縄のような綺麗なビーチがある訳でもないのに、経済的發展の手立ては見出しにくい島である。

そこで近年実施された振興策が、一つはお隣の發展著しい中国人観光客の誘致作戦であり、今一つは不動産開発による中国人の長期滞在型のリゾート客の誘致戦略であった。

観光客の誘致作戦は、天津や大連からの大型フェリーが毎日数千人の「観光」客を乗せて来島するので、一見大成功と思われた。ところが、この中国人客の実態は、「裕福な観光客」ではなく、「貧しい買出人」だった。

その「買い出し客」の実態とは、

① 買い物の対象は高級バッグ等の欧米ブランド品と韓国の化粧品に集中し、その購入目的は自分たちが使うためではなく、中国に持ち帰って転売する金儲けが目的であった。

②即ち、金持ちの優雅な観光ではないので、滞在費はケチケチ作戦を徹底する。宿泊は一泊か二泊の短期で、宿泊費の節約のためフェリーの床で寝泊まりする。

③食事は、島の韓国料理店で食事をする訳だが、韓国独特のしきたりである「キムチや野菜料理は無料で何回もお代りできる」システムを悪用して、ご飯や麺だけを注文しておかずはこの無料のサービスで済ます人が多く、飲食店の店主が中国人のお客はお断りと怒っているそうだ。この中国人の来島者は、「免税店」には大量の金を落すのだが、この免税店の経営者は本土の財閥系の大企業なので、島の人たちにはほとんど恩恵がない。要するに、地元にはほとんど金が落ちず、悪名高き中国人の大量のごみまき散らしの清掃が地元の人たちの日課となっている。

韓国のソウルにもこうした「爆買い」中国人が押し寄せ、近年激減した日本人観光客の埋め合わせができたと言っていたが、日本人観光客が万遍なく金を落とすとしてくれるのに対して、中国人は免税店以外では金を使わないので、商店街の人たちは日本人観光客に帰ってきてほしいと嘆いている。

さて今一つのリゾートマンションの開発戦略は、想像以上の売れ行きで当初はしてやっ

たりと喜んでいたが、実は島のごみ処理問題以上に由々しき問題を引き起こしている。

最近の報道で、濟州島で中国人がマンションを買い漁るので、リゾートマンションのみならず島の人たちが住む住宅街のマンションも高騰し、高くて買えないと言う悲劇が起きていたそうだ。なぜこんな漫画ティックな現象が起きたかを調べたら、概ね次の通りである。

濟州島の地域振興策として、中国人富裕層を対象とした島内不動産への投資呼び込み策として、「濟州島に約五千万円相当の不動産を、五年超の継続保有外国人には韓国の永住権を与える」という不動産投資移民法を五年前に実施した。この制度は、将来の政治的混乱に備えた中国人の亡命先や資産の逃避先として、従来型の米国やカナダやオーストラリアに資産逃避するよりも、故国に身近で且つ安上がりと言う利点があるので、この濟州島への不動産投資が一大ブームとなった。僅か五年の不動産保有で、韓国での永住権が得られ、且つ韓国人のパスポートを取得できるので、中国人ビザとは大違いの「世界万国通行証」を手に入れられるメリットは大きいそうだ。その理由は、観光と商売で世界のどこにでも自由に往来できるからである。

この濟州島への中国人の不動産投資の恩恵は、開発販売したソウルの大企業がその大半を享受しているので、島の地元には踏んだり蹴つたりの状況となっている。この異常な事態に、濟州島の行政政府がその抑制を叫んでいる。中国だが、韓国政府の動きは鈍いらしい。中国人のこうした「爆買い」は、日本にも恩恵を施してくれているのだが、この濟州島の二の舞にならぬように、中国人の誘致策を考えるべきである。

完

四月講演予告

神道界を沸騰させた

明治祭神論争

神道事務局の新神殿に、造化三神と天照大神の四神に、大国主神を加えるか否かを巡り、伊勢派と出雲派に分かれ、五年に及ぶ大論争が、繰り広げられた。

この論争の推移と決着、その後の影響について、言及していきたい。

村上邦治

自由執筆

大老堀田正俊の死

平山 善之

N君 お元気ですか。

貴君は佐倉市甚大寺に堀田正俊の墓があるのをご覧になりましたか？ 五代將軍綱吉の大老で、貞享元年（一六八四）江戸城中で若年寄稲葉正休によって刺殺された人物です。

昨年四月、「儒学殺人事件」と題する本が講談社から出版されました。著者は小川和也氏、日本思想史を専攻する文学博士、中大教授。

この本は、ミステリー小説ではなく、むしろ学術書に近いものですが、出版社が販売政策上こういった題を付けたようです。

綱吉は、正俊亡き後、独裁的となり、生類憐れみの令とよばれた一連の悪法や浅野事件の不当な判決等で暗君の代表格となりましたが、正俊暗殺は綱吉が大老を忌避し、引退を求めたが応じないので殺させた、という趣旨です。実行犯・正休はその場で周囲が斬殺したため、真相は不明ですが、小川教授は綱吉、正俊ふたりの儒学への取り組み方や人柄を丹念に考証することによって推定しています。勿論、作家ではなく学者ですから、断定的な物言いはしませんが、広範な資料、様々な証言から、大変説得性があり、私も賛成です。

殿中の刃傷事件としては、後の浅野長矩と吉良上野介事件より遥かに大きな影響を幕政上に及ぼしました。最近、綱吉を名君だったなどに見直す論者もあるようですが、それは間違いです。正俊があたかも綱吉が名君であると思わせる「颯言録（ようげんろく）」という書物を書き残したので誤解したのでしよう。正俊は自分が擁立した綱吉に、名君になって欲しい、と希求するあまりこの文書を残したようです。

正俊は、家光に殉死した佐倉藩主堀田正盛の三男に生まれました。父正盛殉死、兄正信改易などの逆境にも拘らず、正俊は順調に出世して、上州安中城主となり、やがて老中、古河城主となります。四代家綱が他界後、宮將軍を迎えんとした大老酒井忠清に抗して綱吉を推戴し、その大老となりました。春日局の養子であり、江戸城大奥で家綱と一緒に成長した縁もあったでしょうが、彼自身の領地経営の実績や人柄について残されている資料からみると、立派な人物であったようです。父の遺訓「不矜」（ほこるなかれ）や、母の教え「又新」（日々またあらたに）を座右の銘とし自省怠りなかつたといえます。（正俊の戒名は「不矜院殿又新叢翁大居士」）

刃傷事件後、「権勢に驕っていたから殺された」などという人がいたようですが、誤りでしよう。不矜と驕りは正反対です。又、儒学を

学ぶこと深く、林羅山の子鷲峰などに親炙したようですが、必ずしも朱子学に溺れず、陽明学なども学び、政治上に活かしたそうです。一方、綱吉も儒学を好み、自ら四書五経の類を大名・近臣らに講義をした、といえます。

小川教授は、正俊、綱吉ふたりの儒学の意味を様々な角度や当時の資料から詳細に論じ、その違いを「誰の為の儒学か」にある、とします。正俊の儒学は民のため、即ち治政に活用する為のものであったが、綱吉のそれは「儒学の権威をみずから握り、独占することで將軍権力を強化しよう」としたものであったというわけです。

正俊は冷徹ではなかったが剛直の面があり再々綱吉に諫言することが有った、と言われる。正に良臣と言えましょう。しかし、いつか両者の間は冷えていったのでしよう。自分を擁立してくれた功臣ですから無碍には退けられず、將軍の鬱々たる気分はやがて人を使唆してこれを刺させた。正休は命による事だからでしよう、刺したあと何ら抵抗しなかつたそうです。しかし、生きていられたのは秘密が護れぬから、その場で惨殺された。この辺は、ミステリーじみていますが、ありうる話です。諫言を怠らぬ正俊は、独裁を欲する綱吉には邪魔だったことは確かです。

堀田家はその後山形、福島へと移され幕政から遠ざけられました。正俊は一旦は寛永寺

に葬られたが將軍の忌憚にふれ、直ぐに淺草の金蔵寺へ移され、その後堀田家の菩提寺である甚大寺に改葬されました。正俊の孫、正亮の代に老中に復歸し佐倉へ移封され、以後、佐倉藩主として明治に至ったためです。

元佐倉市長堀田正久氏は正俊から八代目の子孫で、家に伝わる古文書や口伝をもとに「堀田三代記」(昭和六十年新潮社)を書かれました。將軍の命により暗殺された、とは堀田家としては言えなかったが、家中では秘かに伝えられていた、と書いています。子息正典氏も今回、小川氏に家伝来の文書など開示し、協力されたそうです。

長くなりました。また書きます。

自由執筆

日本酒名あれこれ

藤田 隆彦

左党の漆原さんの学術的考察の講演と論文には及びも付かないが、日本酒について平素思っている駄文を以下にしたためてみたので、ご高覧を。私は和食が好きだ。和食にはやはり日本酒が似合う。郷土料理には郷土の地酒

が合う。ところで、私の故郷越中・富山は、日本でも有数の米所・水どころ(日本の名水百選に熊本と並び四つも入選)。北アルプスの「立山連峰」から流れる河川が多くあり、その伏流水とおいしい米を利用して醸造される日本酒は数多く、中学生の頃から親父の晩酌の相手をしてきた。私はアルコール大好き症で、若いころは随分無茶な飲み方をしてきた。今は流石に控えているが、昔はいわば「不適酒不適人」。酒を飲む資格がなかったかもしれない。ところで、酒の味はともかく、力士の四股名同様、そのネーミング(銘柄)にも魅かれているので、共に紹介したい。

地元では、いわく「立山」(言わずと知れた名峰・立山の名を冠した全国区の酒。蔵元は富山県・礪波市)、「幻の瀧」(黒部川中流の剣沢にある落差一四〇mの大滝。剣沢大滝とも、幻の滝とも言われる滝にちなんだもの。富山県・黒部市に酒蔵)、「風の盆」(石川さゆりが歌った、九月一日・二十日の「おわら風の盆」にちなんだ恋歌(演歌)で有名になった県下・八尾町で醸造)、「三笑楽」(合掌造りで有名な世界遺産・五箇山(白川郷)で醸造。中国の故事・虎溪三笑から借りたという「酒は笑い楽しく、飲みたい」から命名の由)、「満寿泉」(北前船の交易で栄えた富山市・岩瀬にある蔵元で醸造。酒の味はいいが、満ち溢れる

幸せ(寿)が泉の如く湧くと言う名前はやや饒舌?)、その他諸々。

隣県の米どころ・越後新潟産の酒も捨て難い。「上善如水」(老子の言葉であるが、水(酒)こそ理想の寓意?ご存じ黒田官兵衛も隠居してこの名を使用。蔵元は越後湯沢)、「吉乃川」(信濃川を吉の川と読み替えたものと思っていたが、実は愛妻家の蔵元の妻の名前「よし」から採った由。長岡産)、「菊水辛口」(名前の由来は定かではないが、帰省の途中、上越新幹線の中でこの酒を缶コップでよく飲んだ。新発田産)、「八海山」(南魚沼市産。淡麗辛口。八海山の名の出所は明らかではない由であるが、私は、かつて山頂付近に八つの池がありそれを海と看做した説を採る)、「越乃寒梅」(一時幻の酒と呼ばれ、なかなか入手難だった時期あり。すっきりとした淡麗辛口。映画化された小説「蔵」のモデル酒蔵との噂あり。新潟市に蔵元)その他数多。最近は、月一回開催の元勤務先OB会では専ら「吉乃川」だ。

富山の西隣の石川では「菊姫」(白山の麓・鶴来町産。信玄・謙信が活躍した永祿年間創業。白山信仰の総本山・白山比咩神社の祭神「菊理媛」から名付けた由)、「天狗の舞」、「菊姫」同様白山市に蔵元がある。同じく白山を源とする手取川の伏流水を利用。創業は江戸期・文政年間。創業時、近くの森から天狗が

太鼓をたたく音が聞こえてきた事により命名の由)、「加賀鷹」(金沢市に蔵元。江戸期・寛永年間が創業。ご存じ加賀藩江戸屋敷専属火消しから命名)、その他。

現役の会社勤め時代、転勤先の土地の酒もよく飲んだ。北海道では「男山」(旭川市。大雪山の伏流水と北海道産米を使用。創業者が京都石清水男山八幡宮に参詣した際靈感を得て、その名を採った由)、「千歳鶴」(札幌市に蔵元。明治年間に創業者が屯田兵相手に酒造りを始めた由)、又勤務終了後会社付近の秋田美人女将(残念ながら旦那が板前)の「秋田料理」の店に仲間と入り浸り、しばしば、「きりたんぼ」や「しよつとる」と共に酒どころ秋田の地酒「爛漫」、「高清水」、「新政」を楽しんだものだ。九州福岡では、どちらかといえば焼酎が多かったが、それでも、佐賀の名酒「窓の梅」や福岡県南部・瀬高地方の矢部川の伏流水を利用した「菊美人」(福岡・瀬高町。享保年間に創業。菊美人は北原白秋が名付け親)等を味わった。大阪勤務中は、天下の酒どころ灘、伏見が近いせいか、そのあたりの全国の酒をよく飲んだ。「白鶴」、「白鹿」、「白鷹」、「剣菱」、「菊正宗」、などなど(以上灘の酒)伏見では「松竹梅」、「月桂冠」、「玉乃光」、「黄桜」等。

前勤務会社の取引先が醸造元の、「春鶯囀」(山梨県に醸造元。早春の鶯の初さえずりの命

名が面白い)、「神渡(みわたりに)」(岡谷市に醸造元。諏訪湖の氷が割れ、神様が湖を渡る言い伝えから)なども頂いた。

その他東北地方では、前述の秋田のほか、「田酒」(青森県)、「一四代」(山形県)、「初孫」(山形・酒田市。明治期創業。昭和初期に当主に初孫が誕生しそれに因んだとの事)、「一の蔵」(宮城県・大崎市。四つの小さな蔵元を統合して一つにまとめ上げた立役者・故鈴木和郎氏の葬儀に、母校・東北大合唱団のOB・OGが「遙かな友に」を歌い、式場に忍び泣きが広がった由。実はこの歌は、私がかつて属した合唱団の愛唱歌でもあったので印象に残った酒)、「あさ開」(盛岡。明治四年創業で、南部杜氏が造る由。現在時々寿司屋で飲んでいる)、「浦霞」(塩釜。江戸・享保年間創業。塩竈神社の指定酒造店。現当主は十三代目の由)などがある。遺憾ながら原発被害の福島県のもものは飲んだ記憶があまりない。広島酒の「酔心」も、居酒屋でカキ鍋とともに痛飲した。残念ながら朝ドラ「まっさん」の生家「竹鶴」は飲んでいない。工場見学した余市産の「ニツカウイスキー」を味わっただけ。

首都圏では、美味しい酒は余り味わった経験はないが、それでも東京では「澤乃井」(青梅市。珍しく東京の地酒で元禄年間創業とは驚き)、神奈川県では「箱根山」(大井町に蔵元。酒匂川の伏流水利用。創業は江戸・寛政

年間。箱根という国際的に著名な土地柄からか?欧州や豪州に輸出されている由)を呑んだ事がある。

その他の変わった名前前の酒では「獺祭」(山口産。獺が狩りの後、獲物を並べる様が祭りのように見えるとの諺に因んだユニークな名で近年有名。入手困難)、「酔鯨」(寒冷地ではなく温暖な地の高知産。元藩主・山内容堂の雅号「鯨海酔候」に由来するとの事)、「美少年」(熊本。蔵元は江戸・宝暦年間創業。名前の由来は唐の詩人・杜甫の「飲中八仙歌」に登場の酒豪の一人に因んだとの事。当方は初め、「肥後もっこす」||九州男児とのイメージからかけ離れた「美少年」が熊本産とは信じられなかった)、「くどき上手」(山形・鶴岡市。元々「亀の井」との平凡な名前であったが、バブル期に首都圏に進出する為、思い切ってこの艶っぽい名に改名の由)など。

今まで、各地を旅行したり、色々な居酒屋に入ったりして、その土地の料理を食するとき、極力地元の地酒をお供にしている。

以上並べた銘柄のほかにも色々な日本酒を呑んだが、いまひとつ玄妙な美味しさを味わえない。せいぜい辛口と甘口ぐらいの差だけは分かる程度の舌で、結局、駄飲、鯨飲の類の飲み人かもしれない。以上